

## W. ハウフの『チビの鼻助』

—— 主人公の分離不安の克服について ——

梅 内 幸 信

### 1. ハウフの『チビの鼻助』

夭折の作家ハウフ (Wilhelm Hauff, 1802-1827) は、1826年から1828年までの、死の直前の3年間にわたって「童話年鑑」の形で彼の童話を発表した。『チビの鼻助』 (*Der Zwerg Nase*, 1826) は、1826年に出版された第一の童話年鑑に収められている。<sup>1</sup> ハウフの創作童話に関しては、『コウノトリになったカリフ』、『チビの鼻助』、『チビ助ムック』が特徴的な三大童話であると見なされる。ハウフの創作童話『チビの鼻助』は、次のような物語である。

野菜売りの母親の手伝いをしている主人公のヤーコブは、ある日野菜を買いにきた気味の悪いお婆さんの魔法によってリスに変えられ、その魔法の元で7年間コックの修業をする羽目となる。その悪い夢から覚めたかと思うと、今度は鼻が顎まで垂れ下がり、首は無く、胸と背中ばかりがふくらみ、不釣り合いな長い腕の先には、大きな手とクモのような指がついているといった醜い小人に変身していた。<sup>2</sup> 父親も母親も、そのように醜い姿恰好の男は自分の息子などではないと言って、鼻助を受け入れることを拒否する。やむなく鼻助は、魔法の元で習ったコックの腕を頼りにある公爵の国の宮殿でコックとして働く。2年ほど経ったある日のこと鼻助は、ガチョウを買いに市場に出かける。3羽のガチョウを鼻助は買い求めるが、そのガチョウは口がきけ、自分は「ゴットランド島に住む魔法使いヴェッターボックの娘」(S. 161f.) ミミで、鼻助の魔法を解く薬草を知っていると言う。こうした折り公爵は、隣国の領主の訪問を受ける。この料理通の領主は、14日間というものの鼻助の作る料理に満足していたが、15日目になって、「うまいものの中でも最高の味のする、あの<パイの女王>」をなぜ出さなかったのかと鼻助に訊ねる。公爵は、鼻助に明日は必ず<パイの女王>を出せ、さもなければ打ち首だと脅す。「新月に栗の木の下にしか生えない」と言われる「ヨロコンデクシャミスル草」(S. 165; *Nießmitlust*) という名の薬草を探し出せずに苦境に陥っている鼻助を助けることができたのは、ガチョウのミミであった。公爵と隣国の領主の間には、料理のことが理由で戦争が巻き起こる。しかし、鼻助とミミは無事、難を逃れる。鼻助は、元の立派な姿のヤーコブに戻って両親に迎えられ、ミミもその魔法が解かれて元の美しい娘に戻り、2人は幸せに暮らす。

この物語の中で印象的な出来事は、1. ヤーコブが魔法の下でリスに変えられ、7年間コックの修業に励む、2. 夢から覚めるとヤーコブは、醜い鼻助に変身している、3. 7年間修業したコックの腕前で公爵国の料理人に採用される、4. 公爵と隣国の領主との間で、互いの料理自慢から戦争が

<sup>1</sup> Hauff, Wilhelm: *Sämtliche Märchen*. Hrsg. v. Hans-Heino Ewers. Reclam. Stuttgart 1986, S. 136-170. この童話からの引用に関しては、このレクラム版に従い、本文引用末尾にページ数を付す。

<sup>2</sup> この鼻助の醜い姿は、E. T. A. ホフマンの『チビ助ツァヘス——またの名をツィノーバー』(*Klein Zaches genannt Zinnober*, 1819)の主人公を想起させる。ハウフの愛読書の中にはホフマンも入っていた (vgl. *Wilhelm Hauff Werke*. Hrsg. v. Bernhard Zeller. 2 Bde. Insel. Frankfurt am Main 1969. 2. Bd., Nachwort, S. 681-698)。

巻き起こる、という4つの項目が挙げられる。しかしながらこの童話の結末は、ハッピー・エンドではあるものの、『コウノトリになったカリフ』のように、主人公のヤーコプと、彼を救出するミミとの結婚で終わっているわけではない。この点において、完全なハッピー・エンドとは言えない。従って、この現実と理想の不調和という点において童話の解釈者には、なにかしら釈然としない、不可解な後味が残らざるをえないのである。

## 2. 無意識界における宝庫

通常、典型的な民俗童話においては、主人公の名前も年齢も明示されない。<sup>3</sup>しかし、ハウフの童話は創作童話であるゆえに、主人公のヤーコプという名前と8歳という年齢が物語の中で明示されている。ヤーコプは、市場で野菜と果物を売る母親を手伝っている。ヤーコプが16歳になったとき、母親のハンネですら16年間も見たことのないほど醜い老婆がハンネの店にやって来る。この老婆は、「小さくとんがった顔に赤い目、鋭いワシ鼻」(S. 137)をしていると描写されている。<sup>4</sup>これは、典型的な魔女の特徴である。<sup>5</sup>この老婆が、母親の野菜や果物に汚い指で触ったり、薬草を醜い鼻で嗅いだりするので、ヤーコプは、怒って「あんた、なんてあつかましいおばあさんなんだ。いやらしい茶色の指をきれいな薬草の中につっこんで、ぐちゃぐちゃにかき混ぜるなんて。おまけに長い鼻でクンクン嗅ぐなんて。見ていた人はもうだれも買う気がしないよ。それなのに、今度はうちの売り物の悪口を言うんだから」(S. 138)と、老婆の態度を非難する。すると老婆は、「ほうや、ねえほうや！ それじゃァ、わしの鼻が、このすてきな長い鼻が、気に入ったのじゃな。おまえさんのお顔の真ん中にも一つ鼻をつけてあげよかねェ、あごまで垂れ下がるようなやつをね」(S. 138)と応える。その後、老婆が購入した6個のキャベツをヤーコプが運び、家に着き、老婆が褒美として作ってくれたスープを食べていると、ヤーコプは眠り込み、7年の間そこで老婆からありとあらゆる料理を学ぶことになる。しかし、あるとき薬草部屋にある戸棚に不思議な薬草を発見する。それは、あの老婆がヤーコプに作って食べさせてくれたスープに使われていた薬草と同じ香りのする薬草であった。ヤーコプがその薬草を嗅ぐと、ヤーコプはくしゃみをして、夢から目覚める。

しかし、夢から覚めて町に出てみるとヤーコプは、人々があちこちで次のように叫ぶ声を耳にする。

「おい、あのみっともないチビを見ろよ！ あいつどこからやって来たんだ？ なんて長い鼻なんだ。首が肩にめりこんでるぜ。それに茶色い手も、いやらしいよなあ！」(S. 145)

ヤーコプが母親の所へ行っても、父親の所へ行っても、両親はヤーコプにまったく気づかない。父親に至っては、「神さまだけがごぞんじだね。七年前、そう、もうずっと前のことだ。あの子は

<sup>3</sup> Vgl. Jolles, André: *Einfache Formen*. Max Niemeyer. Tübingen 1972, S. 132.

<sup>4</sup> ハウフの『チビの鼻助』の翻訳に関しては、次の翻訳を参考にさせて頂いた。ハウフ、ヴィルヘルム『鼻の小人』乾侑美子訳、福音館書店、『冷たい心臓——ハウフ童話集』所収、226-281ページ参照。

<sup>5</sup> 『ヘンゼルとグレーテル』に登場する魔女の特徴であるが、これは一般的な魔女の特徴ともなっている。Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Band 1. Reclam. Stuttgart 1980, S. 105.

市場でさらわれちゃったんですよ」(S. 148) と答える。さらに、父親の言うところによれば、例の老婆は、90歳にもなっていて、50年に一度町へ買出しにやって来るとのことである。ヤーコプは、父親の勧めに従って、床屋のウルバンの所で、鏡に映った次のような自分を見て、涙を流す。

ヤーコプの目は、豚のように小さくなり、鼻はおそろしく長くなって、口の下のおごのところまで垂れ下がっています。首は、すっかりなくなったように見えます。といいますのも、頭が両肩の間に深くめりこんでしまったので、ひどい痛み無しにヤーコプは、右にも左に回せなかったからです。背丈は、7年前の、12歳ころと同じままでした。ところが、他の者なら7年の間に背が上にのびるのに、ヤーコプは横に幅広くなって、背中と胸がつき出てしまっています。まるで、グューグューに詰め物をした小袋のように見えました。この太った上半身が、弱々しく、そんな重荷に耐えられそうにもない短い足の上のっかっています。足の短さにくらべて、両わきに垂れた腕はとても長く、大人の人の腕なのでした。ゴツゴツした手は黄土色で、指がクモの足のように長く、グーッと伸ばせば、かがまないでも床にとどきました。」(S. 151)

このような奇妙奇天烈な格好のヤーコプは客引きの効果があるから、床屋のウルバンは、自分の所で働かないかとヤーコプに話を持ちかけるが、しかし、ヤーコプはこれを断る。というのも、7年前のヤーコプと違って、今のヤーコプには、かなりの心境の変化が見られていたからであった。その様子は、次のように描写されている。

あのいじわるな魔女は、ヤーコプをずんぐりムックリのチビにしてしまいましたが、心根までまげることはできませんでした。ヤーコプは、そのことをはっきり感じました。といいますのも、もう7年前と同じようには考えもしませんでしたし、感じもしなかったからです。いいえ、ヤーコプは、この7年の間に、以前よりずっと賢く、物分かりが良くなったと思いました。自分がもう格好良くないとか、こんなにみにくい姿になったことをたり悲しんだりしません。ただ、お父さんの店から犬のように追い払われたことだけはひどく悲しかったので、ヤーコプはもう一度お母さんのところで確かめよう、と決心しました。(S. 152)

しかしながら、母親によって拒絶され、父親からは叩き出されてしまう羽目となる。止むなくヤーコプは、生きて行くために、老婆の元で身に付けた料理の技術を生かして、料理人として働くことを思いつく。美食家として有名な公爵の宮殿に出向き、総料理長の面前で、公爵が朝食に所望した「デンマーク風スープ」と「ハンブルク風赤身肉団子」(S. 156)を申し分なく作り上げる。しかも、「ハンブルク風赤身肉団子」には、総料理長も知らなかった「イヲナグサメル草」(S. 157; Magentrost)という薬草を加えることによって、一段と美味しいものを作り上げたのであった。この料理がたいそう公爵の気に入る、宮廷お抱えの料理長に任命され、その上「チビの鼻助」という名前まで公爵から拜命する。その後順調にチビの鼻助は、料理長として働く。あるときチビの鼻助は、市場でガ

チョウを三羽買い求める。そのうちの一只は、静かで、「ときどき人間のようにため息をついたり、うめき声を上げたりする」(S. 160) ので、このガチョウを最初に潰してしまおうと考える。するとこのガチョウは、人間の言葉でチビの鼻助を脅す。そこでチビの鼻助は、「偉大なるヴェッターボックの娘ミミ」(S. 161) と名乗るガチョウの身の上話を聞き、彼女を助けることを約束する。さらに詳しくミミの事情を訊ねると彼女は、「ゴットランド島に住む魔法使いヴェッターボックの娘」(S. 161f.) であった。そして、このヴェッターボックが、あるとき年取った妖精と喧嘩をしたとき、この妖精が悪巧みをして、ヴェッターボックを負かし、仕返しにミミをガチョウに変えて、遠くの国へ連れて来たのだという。このミミは、薬草に関する知識があり、もしかするとチビの鼻助にかけられた魔法を解く薬草が見つかるかも知れないとチビの鼻助に話す。

まもなく公爵は、隣の国の侯爵を客として迎えることとなった。すると公爵は、チビの鼻助に、隣の侯爵は美食家であるから、彼が驚くような料理を出し、2つと同じ料理を出してはならないと命じる。14日間侯爵は、チビの鼻助が提供する料理を、一日に少なくとも五度楽しみ、その料理に満足した。15日目になって公爵は、チビの鼻助の料理に満足しているかどうか侯爵に訊ねる。この質問に対し侯爵は、これまで出された料理には満足していると答える。しかし侯爵は、料理を作ったチビの鼻助に、なぜ「スーゼレーヌのパイを出さないのか」と訊ねる。チビの鼻助は、このパイのことを聞いたことがなかったが、侯爵とのお別れの日「料理人からのごあいさつがわりにお出しします」(271ページ) と、とっさの機転によってその場を取り繕う。ところが、主人の公爵が、そのパイを明日出せとチビの鼻助に命じる。途方に暮れたチビの鼻助は、ガチョウのミミの力を借りて、パイの女王スーゼレーヌを作って、公爵と客人に提供する。公爵は美味しいと言って、チビの鼻助が出したパイを褒めるが、しかし客人は、良くできてはいるが、ほんもののスーゼレーヌではないと言う。公爵は怒って、チビの鼻助の首を切り落としてやる、と怒鳴る。チビの鼻助は、公爵の前に身を投げ出して、パイの女王スーゼレーヌに欠けているものを教えて欲しいと懇願する。公爵の言うには、「ヨロコンデシャミスル草」という薬草が欠けているが、しかし、その薬草は公爵の国では知られていないので、公爵は本物のスーゼレーヌは食べるできないと告げる。これを聞くと公爵は、「わしは、フランキスタン王たる名誉にかけて誓う。明日、わしが侯爵殿にお望みのそのパイをお出しするか、さもなければ、こやつをわが宮殿の門の上にさらすこととする。おい、犬め、さあ行け。もう一度、24時間の猶予を与えてやる」(S. 165) と、チビの鼻助に怒鳴る。チビの鼻助は、涙にくれ、ガチョウのミミに相談すると彼女は、その薬草は「古い栗の木の根でしか、花を咲かせない」(S. 166) ことをチビの鼻助に教えてくれる。チビの鼻助は、ガチョウのミミと一緒に宮殿の庭を探して、やっとのことで古い栗の木の根元に生えている薬草を探し当てる。2人が自分たちの部屋に戻って、薬草の臭いを嗅ぐとチビの鼻助は、元の美しいヤーコブの姿に戻ることができたのであった。ヤーコブは、自分を助けてくれたガチョウのミミにお礼として彼女を元の姿に戻すために、ミミと一緒に宮殿を抜け出し、ミミの故郷に向かう。ミミの故郷にたどり着くとヴェッターボックは、娘の魔法を解き、ヤーコブに沢山の贈り物を持たせて、故郷に帰らせる。元の姿に戻ったヤーコブを両親は、自分の息子と認め、その後ヴェッターボックからの贈り物で店を買い、3人は豊かで、幸せな生活を送る。

この結末から翻って物語全体を鳥瞰図的に眺めてみると、例の魔女とおぼしき老婆は、その恐ろしい外見の割には、ヤーコブに対してそれほど害悪をなしていないように思われる。むしろ老婆は、8歳のときから母親にすがりつき、16歳になっても「分離不安」を抱いて、母親のそばを離れず、自立できずに、従ってまた社会性を身に付けることができずにいる少年を、無理やり自分の家に連れて行って、7年間この少年に有用な料理の技術を身に付けさせた、厳しいが、親切なお婆さんと思える。母親と息子は、どちらかというところ、エディプス・コンプレックスに影響されやすい。母親は、息子を過保護に育てることによって甘やかして、社会性の欠如した、自立できない息子にしかねないのである。息子が一人前になるためには、やはり一度母親から離れて、他人の元で生活し、自分を客観的に見るようになる必要がある。ヤーコブは、当初「即自的に」自分と周囲の世の中とを一体のものとして見なしていた。老婆の家で不思議なスープを食べさせられることによって、夢のような7年間を、料理の修業に捧げたのであった。それが終わるとヤーコブは、自分を客観的に、つまり「対自的に」自分を見ることのできるまでに成長していたのである。

そもそも子どもという存在が「意欲の塊」であるという言い方も可能であろう。誕生後暫くの間、この時点における子ども、すなわち乳児は、母親と自分、内界と外界の区別のできない、いわゆる神話的・童話的世界に住んでいる。この世界に住んでいる限り乳児は、いわば全能の神にも近い存在であると言えることができる。<sup>6</sup> というのも、周囲の人々、とりわけ母親は、子どもが大きくなることをひたすら願って、乳児に食物ばかりではなく、乳児が興味を持ちそうなものをすべて惜しみなく与えるのが常であるからである。やがて乳児は、外界の様々な刺激に反応しながらその知覚を発達させることによって、さらには、自分で動き回れるようになることによって、乳幼児の段階に到達する。これと共に乳幼児は、神話的・童話的世界から足を踏み出すこととなる。ところが、外界は乳幼児にとって安全な世界とは言いがたい。つまり乳幼児は、善悪の判断どころか、有害・無害や安全・危険の区別すらできないのである。従って母親は、これまで絶対的な「保護者」として振る舞ってきたにもかかわらず、この段階に至って、「拒絶者」として振る舞わざるを得なくなる。<sup>7</sup> しかしながら、乳児に至るまで全能の神にも近い存在を体験した乳幼児は、母親がこの段階に至って保護者から拒絶者になることの意味が全く理解できないのである。こうして、自己を主張し、拒絶され、再び自己の中へ戻るという循環を何度も繰り返すことによって、乳幼児は徐々ながら自我を形成し始めることとなる。母親を、「母性」や「母なる大地」というさらに普遍的な概念と対置して考えると、乳児とこれを拒絶する母親は、「意識と無意識の対決」という図式で把握されうるかも知れない。<sup>8</sup>

<sup>6</sup> ベッテルハイム、ブルーノ『昔話の魔力』波多野完治／乾侑美子訳、評論社、1987年、174ページ参照。ここでは次のように述べられている。「幼い子どもはだれからも命令されず、望みはすべて親がかなえてくれるのだから、一国の王のようなものだ。少し大きくなるとその王国は取り上げられ、大人に支配されるようになるが、子どもはそのことに強い不満を感じる。そういつき子どもは、自分の王国がほしいと願わずにはいられない。そして、こんな大きな望みを持っている子どもに、大きくなったらなにができるなどという現実的な説明をしても、子どもを満足させるどころか、注意をひくこともできない。」

<sup>7</sup> Vgl. Spitz, René A.: Das Selbst und das Ich (1959). In: *Psychologie des Ich*. WBG, Darmstadt 1974, 263f.

<sup>8</sup> この点に関して、ジビレ・ビルクホイザー-オエリ (Sibylle Birkhäuser-Oeri) は、その著書『おとぎ話における母』において次のように述べている。

「だから自我の発展は、無意識の立場からも必須のことなのである。それにもかかわらず人間は、おのれの母なるこの無意識からどんどん遠ざかり、いたづらに自我を肥大させて、意識の世界におのれを失う危険に陥っている。そこで指導的なのは

このように、数限りなく繰り返される乳幼児の意思と母親の意思との衝突によって、子どもの自我の世界が徐々に境界づけられてゆくのである。大抵は、母親の勝利に終わるのであろうが、しかし、その際乳幼児とはいえ、かなりの精神的葛藤を覚えていることを忘れてはならない。とりわけ、「離乳」という事態は、乳児にとって大きな「分離不安」となって残る場合が多い。この精神的葛藤は、乳幼児が歩行できるようになればなるほど、益々一層大きくなる。とりわけそれは、言葉を話し始める幼児の段階に到達すると、顕著になる。母親としても、この段階になると、ことごとく拒絶するばかりでは通用しなくなる。今や、母親は「教育者」とならなければならないのである。この任務に母親が挫折して、その結果、幼児の精神的葛藤があまりにも大きくなると、幼児が自我の世界にのみ留まりがちになり、場合によっては自閉的な人間として成長する可能性もある。

### 3. 芥川龍之介とゴーゴリの『鼻』

翻って、日本文学を考慮に入れると、芥川龍之介（1892-1927）が、ゴーゴリの作品と全く同じ表題を持つ『鼻』を1917年に発表している。中村真一郎が指摘しているように、ゴーゴリを読んでいた芥川龍之介は、やはりこの作品の執筆に当たってゴーゴリの作品をある程度念頭に置いていたと思われる。それというのも、グロテスク様式とユーモアの程度には相違が見られるものの、この2つの物語の雰囲気は、かなり類似しているからである。ただし、一般には、『鼻』の題材を芥川龍之介は、『今昔物語』巻28「池尾禪珍内供鼻語第20」、および『宇治拾遺物語』巻2「鼻長き僧の事」から取ったと言われている。<sup>9</sup> 芥川の『鼻』における主人公である禪智内供の鼻は、次のように描かれている。

長さは五六寸あって、上くちびるの上からあごの下まで下がっている。形は元も先も同じように太い。言わば、細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下がっているのである。<sup>10</sup>

内供は、この鼻をひどく恥じて、なんとか普通のように短くできないものかと思案する。あるとき、京に上って医者から長い鼻を短くする方法を習ってきた弟子の僧が、内供の鼻にこの治療を

---

の自我コンプレックスの傍らには、しばしば無意識の影がいて、とりわけ欲求の表出をとりしきり自分本位のやり方で悪用している。ところが母なる自然には、これがまったく我慢ならない。生命力の表出は、個人をこえた目的を実現するためにある。それが個人的な利益や狭い人間的な理性に奉仕することに耐えられないのである。自我があまりにも肥大化すると、彼女〔お姫さま〕は敵に回ってしまう。そして自我を破壊しようとする。自我の存在が自分にとって必要であることを本来承知していなければならないのに、である。しかしそのためには、人間的な意識の光が彼女には欠けている。

この段階で自身から無意識に向きを変え、それと対決する（アウスアインダー・ゼツツェン）ことがないと、無意識と和解することがほとんどできなくなる。人は、大変貴重なものを手に入れるためには大きい危険に身をさらさねばならぬ、おとぎ話の主人公のような状態になる。なぜなら、無意識に身を向けるとは、たとえそうしなければならぬにしても、つねに大きい危険を意味するからである。母たちのもとへ下降すればどうなるのかは、決してあらかじめ保証されたものではない。それはしばしば、象徴的に一つの死として夢に現われる。それが新しい誕生に先立たねばならないのである。自我（イッヒ）は、自分より秀れた新しい生命の中心、自己（ゼルプスト）が母から立ち現われる前に、まず自分を捨てねばならない。母は、そして彼女だけが、人間を生まれ変わらせる可能性をもっている。人間は母ととり組まねばならない。すなわち無意識を、夢や空想などそのあらゆる現われを通して、まじめにとり上げてその導きに従わねばならない。そこで無意識が、ふたたび導き手としての力になることができる。この力はおとぎ話では、たとえば母性的人物の形で現われ、道に迷った主人公に出口を教えたり、方向を示す糸玉を贈ったりする」（ビルクホイザー-オエリ, S.『おとぎ話における母』氏原寛訳, 人文書院, 1987年, 43-44ページ）。

<sup>9</sup> 芥川龍之介『羅生門・鼻・芋粥・偷盜』岩波書店, 1992年, 172-173ページ参照。

<sup>10</sup> 同上, 20ページ。

試みる。その甲斐があって、内供の鼻は短くなるのであるが、しかし、喜びも束の間、鼻が短くなると内供は無性に機嫌が悪くなる。そうして、自分自身でも短くなった鼻を恨めしく思うまでになる。すると、やがてある日、鼻は再び元のように長くなって、内供もようよう安堵して、晴れ晴れとした気分になれるのである。

人間にあってその存在の全体を象徴的に表すものは、顔である。その顔の中には、目や口、耳といった肉体的な機能上は恐らく鼻よりも重要であると思われる器官がある。しかしながら鼻は、その嗅覚上の機能においてではなく、そのまさに突出した形によって顔の中で存在論上最も大きな意味を獲得している。それというのも鼻は、顔に平面的というよりは、立体的な変化を与える唯一のものであるからである。鼻の持つ立体的な特徴が、いわば人間の人格にも、かなり直接的な形で関連していると思われる。例えば、日本語において「鼻が高い」と言えば、実際の鼻が高いという意味の他に、「得意なさまである、自慢する」という意味を持っている。また、ドイツ語においても、鼻に関して〈die Nase aufblähen, 威張っている〉とか、〈die Nase hoch tragen, 思い上がる〉といった用法がある。面白いことに、鼻がなにかしらの意味において異常をきたせば、その意味は逆の意味になってしまうのである。日本語で「鼻を折る」と言えば、「恥をかかせる、慢心を挫くこと」を意味し、ドイツ語で *jm. eine Nase machen*, ある人に長い鼻をつける) と言えば、「ある人を馬鹿にする、からかう」ことを意味している。<sup>11</sup> 異常に大き過ぎる鼻とか長過ぎる鼻とかは、目立ち過ぎて逆効果を生み出す。ある意味では、鼻が無いことと同じように異常である。

ゴーゴリ (Nikolai Vasilievitch Gogoli, 1809-1852) も、その中の1人であった。彼は、1836年に『鼻』という短編小説を発表している。ただし、ゴーゴリがこの作品を完成したのは1833年頃であると推定される。当初彼は、この作品を「モスクワ観察者」誌に送ったが、あまりにも「低俗・醜悪である」という理由で掲載を拒否されたと言われる。1836年になってこの作品は、ゴーゴリの師匠であるプーシキンの主宰する「現代人」誌の第3号に発表された。<sup>12</sup>

この作品は、主人公の鼻が分身として登場する極めてグロテスクな雰囲気を持つ物語である。グロテスク様式とファンタジーという点で、この作品はホフマン文学とも大きな共通点を持っている。<sup>13</sup> 本来、『鼻』は不合理で、暗い、深刻な内容の物語であるが、しかし、作者独特のユーモアによって、軽妙な洒落を含む風刺文学となっている。そのグロテスクな幻想性にもかかわらず、物語全体は、透徹したリアリズムの精神によって描かれている。

理髪師のイワン・ヤーコウレヴィッチが、朝食のパンの中に鼻を発見する場面から物語は始まる。焼けたパンの中から生きた鼻が発見されるというこの発端は、なんとも無気味なものである。その鼻は、毎週水曜と日曜に彼に顔を剃らせる八等官コワリョーフ氏のものである。一方、コワリョーフ氏の方は朝起きて前の晩自分の鼻の頭に吹き出していたにきびを見ようと思って鏡を取って見ると、鼻がなくて、その跡がのっぺらぼうになっているのに気づく。そこで彼は、鼻を見つけ出して

<sup>11</sup> 『独和大事典』[コンパクト版]、小学館、1990年、1529-1530ページ参照。

<sup>12</sup> 後藤明生『笑いの方法——あるいはニコライ・ゴーゴリ』福武書店、1990年、47-48ページ参照。『世界文学大系 80 ゴーゴリ』横田瑞徳（訳者代表）、筑摩書房、1963年、368-369ページ参照。

<sup>13</sup> Vgl. Gogol, Nikolai: *Die Nase. Der Sorotschinsker Jahrmakrt*. Reclam. Stuttgart 1977, S. 77. Vgl. Martini, Fritz: Wilhelm Hauff. In: *Deutsche Dichter der Romantik*. Hrsg. v. Benno von Wiese. Erich Schmidt. Berlin 1971, S. 444, 451.

もらおうと、警視総監の元へ出かける。が、その途中で彼は、礼服を身につけ紳士のなりをした自分の鼻がある家に入ってゆくのを目撃する。数分後に鼻は再び家から出て来るが、その鼻は「立襟のついた金の縫い取りをした礼服に鞣革のズボンをはいて、腰には剣を吊っていた」<sup>14</sup>。羽毛のついた帽子から察すれば、鼻はコワリョーフ氏よりも身分が高い五等官の位にある。主人公ばかりではなく、作者もそう考えているように、鼻が礼服を着るということはありうることだろうか。ありうるとすれば、非常にグロテスクである。しかも、この鼻は人間と同じように口がきけるのである。

鼻は「人間の威信」、あるいは少々大げさな表現になるかも知れないが、「存在の証」を意味するものと解釈して差し支えないと思われる。社会的身分や威信にこだわる人ほど、自分の鼻の有り様を気にするのである。彼は、自分の官位を自慢する反面、自分より身分の高い官位には大きなコンプレックスを抱いている。恐らくコワリョーフ氏の高慢さ、虚栄、自惚れ、名誉欲、出世欲といったものが無意識の世界で長い間抑圧された結果、その抑圧の反動として、抑圧された無意識のエネルギーが鼻の消失という形を取って意識の世界に現れたものと考えられる。この抑圧は、コワリョーフ氏の怒りっぽい性格や地位や身分に関する偏狭な考えによって益々高められるのである。

鼻が無くなったことについて彼は、決して自分の中にその原因があるとは思わない。常に、その原因は他人にあると考える。そして、佐官夫人ポドトチナや理髪師のイワンにその責任を転嫁しようとする。すべてこういった態度を示すのは、自己の内的洞察を欠いた俗人のなせる業である。俗人は、常に分別臭く、現実のおごりな価値観に忠実で、自分独自の価値観・世界観を持つことができない。また、想像力が欠如しているゆえに、現実世界においてなにかしら現実世界の論理を超える事件が起こると、もはやこの事件に対処する力を持たないのである。その結果、溺れた人間が藁をも掴むように、他人に責任を転嫁し、不安に駆られて理由もなしにもがくことになる。コワリョーフ氏はついに見つけた鼻をなんとか自分の顔にくっつけようと必死の努力をするが、すべての試みは無駄に終わる。そうして、彼の鼻の話で町中がもちきりになっているその真っ最中に、鼻はひとりで元の場所に戻る。つまり、抑圧された無意識の化身である鼻が、好き勝手に自分のしたいことをしてその抑圧のエネルギーを発散した後に、今度は再び正常な状態に戻ったというわけである。しかし、コワリョーフ氏は、自分の内面の中で起こっていることには少しも気づかずに、鼻が戻ると安心して、また元の生活を続けるのである。ここでは、主人公の内的抑圧が鼻の登場によって解消されただけで、分離不安という本質的な問題は解決していない。

作者ゴーゴリは、このグロテスクな物語によって、内的洞察に達することがなく、認識を獲得する機会が与えられても、絶えず元の黙阿弥に戻ってしまう俗人の救いがたい愚かさを痛烈に風刺しているように思われる。主人公コワリョーフは、鼻を失うという恐ろしい体験を通じて、なんら学ぶことのない俗人である。この種の人間には、自分では大罪を犯すつもりも、また、その勇気もないであろうが、しかし、最も大きな罪を犯す危険性を持っている。すなわち、俗人の俗人と呼ばれる所以は、いわゆる自覚がないために、ひたすら小心翼翼たる生活を堅持しようとするあまり、最も大切な良心をも見失ってしまいかねない。良心を見失ってしまう危険は、鼻が消えるという事態の形で顕在化していたのであった。この時こそ主人公は、やはり自己に対して、その内なる声を

<sup>14</sup> ゴーゴリ『外套・鼻』平井肇訳、岩波書店、1991年、69ページ。

聞き取るべく、耳を傾けねばならなかったのである。

芥川龍之介の『鼻』にしても、ゴーゴリの『鼻』にしても、特徴的なことは、主人公の「鼻」の問題を解決に向けて援助してくれる女性（アニマ）が登場しないことである。これに反して、『チビの鼻助』ではミミという女性が登場し、主人公に力を貸す。この意味において、作者の芥川龍之介にしても、ゴーゴリにしても、母親との間に分離不安を抱いていたと推測される。両作者とも、その母親からの「分離不安」が大きくなり、これが鼻という形で問題化され、具体化されることによって抑圧解消されていると考えられる。芥川は、両親の大厄の年に生まれたので、一旦捨て子の形を採ったと言われる。また、父親は短気で、その母親は、狂人として龍之介が11歳のとき、43歳で亡くなった。このような家庭環境に育った龍之介は、「実父母の血を嫌悪し」、「狂気の子という遺伝に絶えずおびやかされていた」<sup>15</sup>と言われる。ゴーゴリの母親は、「宗教的、神秘主義的」な性格の持ち主で、ゴーゴリ自身は「二度流産がつづいたあとの虚弱な長子」<sup>16</sup>だった。彼は、晩年には「神秘主義的傾向が著しく増大し、自分の作品が神を冒瀆するものである」<sup>17</sup>と思ひ込み、最終的には一切の食物を絶って、悶死したと言われる。<sup>18</sup>

#### 4. くしゃみする鼻

筆者は、おそらく大半の読者と同様、主人公である鼻助の「大きな鼻」に関心を奪われ、物語の核心を見失っていたのであろうと思われる。この童話の核心が「鼻助の魔法がミミ（アニマ）の援助によって解かれ、立派な姿のヤーコブに戻り、両親、とりわけ母親に迎え入れられるところにある」と気づいたとき、この童話の解釈は、一気に進展し始めたのである。鼻助は、魔法の元で修業し、公爵の宮廷で料理長として腕を揮う。しかし、最後に鼻助は、パイの女王スーゼレーヌに用いる「ヨロコデクシャミスル草」という調味料を学んでいなかったのである。ガチョウのミミの手助けによってこの薬草を手に入れることができたとき、鼻助は「クシャミ」をし、元の美しい姿に戻ることができたのであった。ここで注目しなければならない局面は、この物語において主人公ヤーコブは、クシャミによって現実から夢（非現実）、そして非現実から現実へと「反転」していることである。すなわち主人公は、クシャミによって対立する世界を、ちょうど廻り舞台に立つ時のように、反転させるのである。その反転は、単に現実から非現実への急転を意味するだけではない。反転は、意識から無意識へ、陽から陰へ、躁から鬱への急転をも意味している。ある意味において、マザー・コンプレックスに陥っている息子は、自立し、自己実現するためには、自分の無意識の世界を体験し、シャドウを克服して、自己のペルソナを確立しなければならないのである。この意味において、クシャミは、意識と無意識、現実と非現実、日常と非日常、といった緊張関係の両極の転換を促す運動行為であると見なされる。

<sup>15</sup> 森本修『芥川龍之介』桜楓社、1971年、6-7ページ。吉田精一『芥川龍之介 I』（吉田精一著作集 第1巻）、桜楓社、1979年、7-10ページ参照。吉田精一『芥川龍之介の生涯と芸術』、『芥川龍之介研究』（吉田精一編）所収、筑摩書房、1961年、23-24ページ参照。『芥川龍之介』（海老井英次編）、『鑑賞 日本現代文学』（第11巻）、角川書店、1981年、5-8ページ参照。

<sup>16</sup> 『世界文学大系 80 ゴーゴリ』、前掲書、373ページ。

<sup>17</sup> 同上、378ページ。ゴーゴリの母親に宛てた手紙を読むと、彼の分離不安が窺い知れる（ナボコフ、ウラジーミル『ニコライ・ゴーゴリ』青山太郎訳、紀伊國屋書店、1973年、19-26ページ参照）。

<sup>18</sup> トロワイヤ、アンリ『ゴーゴリ伝』村上香住子訳、中央公論社、1984年、12-13、484-503ページ参照。

チビの鼻助は、老婆の元で料理を学ぶとはいえ、いきなり料理を作り始めるわけではない。まず、1年目には「靴磨き」をし、2年目には「老婆の食べるパンを作るために埃集め」を学び、3年目には「老婆の飲み水を調達するためにバラの花の滴」を集める。4年目には「ガラスで出来た床を磨く技術」を身に付け、5年目にしてようやく料理方法を学び始める。7年の歳月が過ぎたところで、老婆から一人前の料理人として認められ、まともな料理を作ることを命じられるのである(vgl. 143f.)。この7年の修業期間は、ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) の教育観を想起させる。シュタイナーに拠れば、人間は、「1. 物質的身体 (0歳)」、「2. 生命体 (エーテル体: 7歳)」、「3. 感情体 (アストラル体: 14歳)」、「4. 自我 (21歳)」という4つの構成体から成るといふ。そして、この4つの構成体は、4つの時期に分けて成長させられると言われる。<sup>19</sup> この考え方は、『チビの鼻助』における7年の修業期間に奇しくも一致している。これによると、人間は、14歳から21歳の間に分離不安を克服しなければならないことになる。

実際、「鼻」のイメージとシンボルを調べてみると、1. 詮索好き、おせっかい、2. 俗物根性、3. 無邪気、4. 美の力、といった内容が記載されている。<sup>20</sup> これらの内容は、一見すると、それほど鼻のイメージとシンボルにふさわしくないもののように見える。しかし、熟考してみると、1の「詮索好き、おせっかい」は、芥川の『鼻』における主人公である禅智内供にも、ゴーゴリの『鼻』の主人公八等官コワリョーフ氏にも当てはまるように思われてくる。彼らは、小心翼翼とした度量の小さい「俗物」である。そして、必要以上に人目を気にかけている。これを「無邪気」と言えば、無邪気ではあるが、その核心を成すものは「愚かさ」である。彼らはともに、鼻に対して異常なほどまでに執着している。鼻が大きいことや、自分より身分が高いことにこだわっている。標準から外れた鼻は、まるで自分の「美」、すなわち価値を減ずるかのように考えている。鼻の様態を必要以上に気にかける男性、また女性との健全な交友関係を築けない男性は、多かれ少なかれ、依然として分離不安を抱えた男性と判断される。

『チビの鼻助』の主人公ヤーコプも、場合によっては、「分離不安」に捕われ、自立できず、両親、とりわけ母親の元から離れられずに、俗物根性を抱えたまま大人になる可能性を持った人間であったのかも知れない。この危険な臭いを嗅ぎつけて、ヤーコプの両親の遠縁に当たる老婆が、母親のハンネの店を訪ね、自分の孫息子を自分の家に引き取って、料理の技を叩き込んだと解釈される。この関連において老婆は、母親ハンネの母であると推定される。<sup>21</sup> というのも祖母は、一般に孫に無条件の愛を注ぐものであるが、祖母が孫息子への場合には、この祖母は母親の母に当たり、ちょうど『赤ずきん』(KHM 26)のように祖母が孫娘への場合、その祖母は父親の母に当たる。ただし、この祖母の孫息子への無条件の愛は、両親の過保護がもたらすのと同じように、時としてその愛の対象である孫息子を自由奔放に育て上げてしまいかねない。事実、ヤーコプは、老婆に教育されて、料理の技術は大いに身に付けたものの、一種の「専門バカ」によりになり、本来保持していた「俗物根性」は増幅させられていたと考えられる。ヤーコプの大きくて長い鼻、小さな体、バランスを欠いた身体は、心身の不調和を示すものである。ヤーコプは、自己実現するためには、やはりグレー

<sup>19</sup> ベルン自由教育連盟(編)『教育からの脱皮』子安美知子(監訳)、晩成書房、1980年、11-12ページ参照。

<sup>20</sup> フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、1988年、462-463ページ。

<sup>21</sup> ビルクホイザー-オエリ『おとぎ話における母』、前掲書、20-21ページ参照。

ト・マザーの持つ否定的な側面を克服しなければならないのである。そのために彼は同時に、無意識と対決せざるをえないのである。<sup>22</sup>

創造的な人間には、常に試練が課される。それは、意識と無意識、シャドウとペルソナを統合する試みである。無意識とシャドウの力は膨大なものであるために、創造的な人間が対峙する試練は並み大抵のものではない。その際には援助者も必要であるが、しかしなによりも自発的な洞察が求められる。とはいえ、それは簡単に獲得できるものでもない。そこで、本能的な弾みの力であるクシャミが無意識の世界から訪れるのである。それは、創造的な人間が、懸命に意識と無意識を統合しようと努めるとき、自然に生まれるものであると考えられる。この意味においてクシャミは、一種の救済力でもある。マザー・コンプレックスに捕われている人間は、試練の道を歩むことになるが、勇敢に試練に立ち向かえば、必ずや試練を乗り越えることができるのである。ビルクホイザー-オエリは、「母固着の人」について、次のように述べている。<sup>23</sup>

だから母固着の人とは、まさに創造性を負わされた人なのである。したがって創造的な行為を通してのみ、しばらくの間母親から解放される。というのは、彼を苦しめているのは、結局のところ現実の母親とのつながりではなく、偉大な、目に見えることのない元型的な母親、つまり無意識とのつながりだからである。彼を魅惑し、たえず創造的行為に誘おうとするのが、心の中の母性的な基盤であることを知るに至って、はじめて、実際に母親から自由になることができる。その場合でも、ただしばらくの間ではあるが。彼は創造的な仕事を通して繰り返し母親から身を離す。

ヤーコプの場合、その創造的な仕事は料理であったのだが、料理は単に家政に属する仕事に留まるのではなく、宇宙の営為とも繋がっていることを看過してはならない。

グリム童話の中にも、グレート・マザーがお婆さんの姿を取って現れている童話がある。それは、『ホレばあさん』（KHM 24）である。この童話で主人公の善い子は、美しくて勤勉で、パンの叫びとリンゴの呼びかけに答える。これに反し、悪い子は、醜くて怠け者で、パンの叫びとリンゴの呼びかけにも応えない。黄金づくめで帰って来た善い子を見て悪い子は、黄金に対する欲望から、自ら進んで糸巻きを井戸へ放り込んで、地下の世界に辿り着く。そこで悪い子は、善い子と全く同じ状況に巡り合わせるが、しかし、なまけもので、我が身のことしか考えることしかできない利己主義者であるゆえに、パンの要求にも、リンゴの木の要求にも応えることができない。悪い子は、黄金に目が眩んで、大きな歯のはえたホレばあさんを恐れもせず、進んで雇われることとなる。ホレばあさんは悪い子に、善い子と同じ仕事を課すが、悪い子は二日目からもうなまけだし、三日目には朝になっても起きようとしない。そこでホレばあさんは、自分から悪い子の奉公を断る。ところ

<sup>22</sup> ビルクホイザー-オエリは、「母神」に関して、次のように述べている。「心理学用語におき代えると、この母神は全集合的無意識のごときものを表している。それはあらゆる元型を含むと同時に、あらゆる心的生命が始まりかつ新たにされる場所である。母親像を集合的無意識と解釈することで、その意味を矮小化したことにはもちろん決してならない。なぜなら、集合的無意識がいつも簡単に人間を圧倒してしまう、把握しがたい偉大な力であることは明らかだからである。その力は、同時にあらゆる新しいものの源泉でもある」（ビルクホイザー-オエリ『おとぎ話における母』、前掲書、20ページ）。

<sup>23</sup> 同書、24ページ。

が、これ幸いと悪い子は、褒美として黄金を期待するが、ホレばあさんは悪い子をコールタール塗れにしまうのである。

善い子と悪い子が同じように出会うパンとリンゴの木は、人工と自然、天と地、光と闇、南極と北極といった対立原理の象徴と見なすこともできる。パンは、人間にとって大切な食物であり、焼き上がっているパンはすべて完全に食べてやらなければならない。また、パンは決して自然の産物ではなく、人為的に作られる物である。一方、リンゴは、自然の産物である。従って、パンは地上における人間の営み全体を象徴的に表し、リンゴは「大地」を象徴的に表し、場合によっては「あらゆる地球の営み」を示唆しているとも解釈される。一方は人為的な極の代表であり、他方は自然的な極の代表である。

この意味において、パンとリンゴの木は、人為的な活動と自然の活動を包摂する地球の営みを象徴的に表していると考えられる。従って、パンとリンゴの木の要求に応えるということは、この地球の営みを理解しているということ、ないしは、その地球の営みの法則に沿って生きているということを示唆していると考えられる。この地上における人間は、単に人間の営みを理解するだけでは不十分であると言わざるをえない。人間は、この地上において、人工のものを理解すると同時に、人工のものをその根底において支えている地球そのものの営みを理解しなくてはならない。地球の営みを理解するためには、まず地球の法則、あるいはリズムを理解しなくてはならない。このリズムは、地上における一切のものを支配している。それは、地上の生物・無生物ばかりではなく、人間が作った人工のものですら支配している。

肝腎なことは、羽毛布団をはたけば、地上では雪が降るという自然現象と結び付くと言う比喩の真意である。些事のように思われるが、しかし、ミクロ世界である家庭における炊事洗濯、そして掃除は、マクロ世界においては、降雨・降雪、火山・洪水などの自然現象に結び付くのである。この意味において、チビの鼻助が老婆の元で修業した料理も、マクロ世界では自然の大きな摂理と関連していると解釈される。実際、人間は食べ物、つまり栄養を外界から採り入れることなくして存続できない。金銭欲、出世欲、性欲など、様々な欲があるが、その中で食欲こそが最も根源的なものであると思われる。そうだとすれば、料理を極めることも、人間にとっては最重要課題の1つなのであろう。

## 5. 分離不安の克服

マザー・コンプレックスを克服するためには、「魔女」によって代表されているグレート・マザーの厳しい側面を一度は体験しなければならない。これと同時に、自己の無意識の中で抑圧されているアニマを救出し、育成する契機となる女性像を必要とする。結婚を前提としないアニマの場合、童話においては往々にして妹として登場する。典型的な例は、『兄さんと妹』(KHM 11)である。妹が兄の無意識において抑圧されているアニマを労り、育むのである。ヨランダ・ヤコービは、その著書『ユング心理学』の中で、アニムスとアニマの関係について次のように述べている。

無意識的な心(プシュヒュー)の種々の側面や特徴が相互にまだ区別されていず、はっき

りと分化されていず、意識に結びつけられていないあいだは（たとえば人が自分の影を知らないでいるあいだは）、男性の無意識の総体は女性的な徴候を有し、女性のそれは男性的な徴候を有する。すなわち無意識の中のすべては、男性的ないし女性的な性質によっていわば色づけられているのである。それゆえユングも、この性格特徴を目だたせようという場合に限って、無意識のこの領域をそのものずばり単にアニマないしアニムスと呼んでいる。従ってペルソナが硬直すると、換言すれば一機能、すなわち主要機能のみが分化して、他の三機能がまだ多かれ少なかれ未分化であるような場合には、アニマは当然この三機能の混合を表示することになるだろう。だが分析が進んでくると、すなわち二つの副次機能の発達につれてアニマは次第次第に、もっとも暗い第四の機能、すなわち劣等機能の形態化されたものとして現われてくるようになる。また影がまだ未分化である場合、すなわちそれがまだ完全に無意識の深みにとどまっている場合も、影はしばしばアニマの諸特徴と混り合っている。以上のような場合、われわれは夢において、三つ一組の影形象に出会う。これらはいわばまだ意識されていない三機能に属しているわけである。同様にまた三つ一組のアニマないしアニムス形象に出会う。このような混合は同時にまた、夢の中では、一つの影形象と一つのアニマないしアニムス形象との組合せ、一種の「対状態」、一種の「結婚」となって現われることもある。<sup>24</sup>

このヤコービの解説からも分かるように、男性の無意識の中であってアニムスが助長されてアニマが抑圧され、他方、女性の無意識にあってアニマが助長されてアニムスが抑圧される。人間の成長において、この傾向がとりわけ強められるのは、思春期においてであると言えよう。いずれにしても、ヤコービのアニマとアニムスの関係に関する解説から明確に理解される点は、「結婚」にも譬えられるような、その相互補償的な関係である。『チビの鼻助』において、主人公鼻助は、自分を窮境から救ってくれたミミと結婚はしない。しかし、お互いが兄妹のように、兄は妹の自己実現に力を貸し、妹も兄の自己実現に力を貸すことで満足している。このようにアニムスとアニマの関係にも、具体的には「息子と母親」「息子と祖母」「兄と妹」「息子と叔母・伯母」「兄と妹」「息子と恋人」というように、種々の関係が考えられる。この童話におけるヤコーブとミミの関係は、「兄と妹」の関係に相当している。

「ヨロコンデクシャミスル草」を使ったスープを食べたときヤコーブは、意識の世界から無意識ないし夢の世界に入り、7年間そこで料理の修業をした。この夢を別な観点から考察してみると、この夢は、ある意味においてヤコーブの欠点を先取りしていたとも考えられる。つまり、無意識の中で、グレート・マザーの否定的な側面を代表している魔女の元で、通常は女性の仕事と見なされる料理の修業に励まざるをえなかったのである。この関連において、夢はヤコーブにそのマザー・コンプレックスを治癒する力を与えていたのであった。<sup>25</sup> 薬草部屋のとある戸棚に偶然「ヨロコンデクシャミスル草」を発見し、これを嗅いでクシャミをしたときヤコーブは、そのクシャミの反動で、

<sup>24</sup> ヤコービ、ヨランダ『ユングの心理学』高橋義孝監修、池田絢一・石田行仁・中谷朝之・百溪三郎共訳、日本教文社、1980年、216-217ページ。

<sup>25</sup> マイヤー、C. A.『夢の治癒力』秋山さと子訳、筑摩書房、1986年、viiページ参照。「無意識に語らせる——現代のわれわれはそういう言い方をする——ためには、意識が沈黙しなければならない。」

意識の世界に戻ることができた。とはいえ、鼻の大きなチビの姿になっていた。それにもかかわらず、ヤーコブの認識は高まっていたので、意識の世界で料理人として人生の試練を乗り越えようとする。しかし、老婆の元でありとあらゆる料理を学んだとはいえ老婆は、ヤーコブに彼をリスに変えた「ヨロコンデクシャミスル草」入りのスープだけは教えなかったのである。というのも、老婆がこれをヤーコブに教えれば、老婆の愛は「無条件」でなくなってしまうからである。ヤーコブを自分に縛り付けておくために老婆は、この「ヨロコビクシャミ草」だけはヤーコブに教えなかったのである。これを教えることができるのは、ヤーコブのアニマ、すなわちミミだけである。男性にとって、祖母は自分に無条件の愛を、母親と父親はエディプス・コンプレックスに支配された愛を与える。しかしながら、神秘の結合を前提にした愛を与えることができるのは、唯一アニマであるミミだけである。このミミが、ヤーコブに「ヨロコンデクシャミスル草」を見つけてやる。これによってヤーコブは、元の美しい青年に戻ることができるのである。このことは、ヤーコブが「分離不安」を克服し、生来持っていた「俗物根性」を排し、自立した一人前の男性となったことを示している。この自立性は、端的に言うと、社会性を意味する。<sup>26</sup> 自立した一人前の男性になったとき、男性は両親に本当の意味で「息子として」迎えられるのである。親子の真の愛情とは、こうしたものである。そこに、両者の「甘え」は存在しない。

その結論をここで簡潔にまとめると、「主人公ヤーコブは、母親の愛情によって立派な男性になることを暗に期待されることによって、自己実現という大きな試練を課せられる。しかし、この試練を果たすためには、魔法の元で7年間修業しなければならず、この修業を完遂するためには、若い女性であるミミの力を借りなければならなかった。こうして自己実現を図ることができたヤーコブは、めでたく両親に迎え入れられた」というものである。これを普遍化すると、「男性は、最初から瑕を持った存在として生まれる。やがて男性は、グレート・マザーの愛情によって自己実現を求められるものの、グレート・マザーの厳しい側面である試練を乗り越えるために、いったん母親の元を離れ、その試練においてアニマによって助けられることによって自己実現を図ることができる。そのとき初めて、老賢人への道が開かれる。ここで男性を女性と代えるとき、逆もしかりである」という公式を得ることができる。つまるところ、対立原理の両極のそれぞれは、互いに対立をもたすからといって一方を消去するのではなく、その相互補償という機能を理解し、最終的な自己実現のために、他方から自らの足りない分を受け取らなければならないのである。

<sup>26</sup> Vgl. Martini, Fritz: a. a. O., S. 454, 466.